



巻頭エッセイ	1
シリーズ「福祉にみる“いのち”」②	2
コラム「人間を考える」⑥	3
2019年度講座案内	4

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市 中村区 稲葉地 町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

昨年度末で定年退職の木野美恵子教授が所員を退任し、新たに岩瀬真寿美准教授が所員に就任しました。センターは今年度も、連続講座（全5回）の開催と BRIDGE（年2回）の刊行を中心に活動してまいります。今号は学長より巻頭言をいただきました。各シリーズも毎回のちをめぐら問題提起をいただいています。ぜひお読みください。

2019.7.1 No.50

人間の尊厳と命の大切さ

松田 正久

教育の役割とは、何だろうか？私も、教育界に長年、身を置いてきた者として、この問題は、常に頭のどこかにあるのである。「教育とは人間の尊さを打ち立てること」と、宗像誠也（1902-1970）は「私の教育宣言」（1958年、岩波新書）で述べている。60年前の本であるが、この「人間の尊厳の確立」が教育の本質を表していると私は今でも考えている。この「人間の尊厳」は、世界人権宣言（1948）にも日本国憲法（1948）にも謳われている。前者は30条からなり、人間の尊厳とは何かが明確に語られている。すべての人は同等の権利を持って生まれ、すべての人は自由でなくてはならないし、安心して生きる権利を持っていること、一人ひとりのいのちが大切に守られなければならないことが明瞭に語られている。特に第26条2項では、「教育は、人格の完全な発展並びに人権及び基本的自由の尊重の強化を目的としなければならない。」と、その目的について書かれている。我が国の憲法でも「第三章国民の権利と義務」

（第10条～第40条）で、同じ概念が規定してある。そして第99条は国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員の憲法尊重・擁護義務を定めているように、憲法は為政者を拘束する役割を持っている。

私たちは、この世界を成り立たせるための基本的原理について、考えることが重要である。人間の尊さについて考えることは、いのちについて考えることに繋がり、「宗教は、人間の尊さを打ち立てる限りにおいて価値がある」（前掲書）と述べているが、私も同感である。沖縄復帰47年の5月15日、玉城知事は、「『自立』、『共生』、『多様性』の理念のもと、全ての人の尊厳を守り、誰一人取り残すことのない社会を実現する」と決意を述べたことが報道されている。一人でも多くの教育者・宗教者が、人間の尊厳の確立に向けて、頑張ってくれることを期待しているし、私もその努力を続けていきたいと思う。

（本学 学長）

“輝くいのち”を支える人に与えられた役割

高尾 淳子

二分脊椎という先天性奇形がある。二分脊椎の子どもは脊柱管が二分された状態で誕生する。それらの子どもの大半は発生部位により下肢の運動や知覚に麻痺が生じ、歩行や排尿、排便などの機能障がいを伴うため、導尿や洗腸などの医療的ケアを必要とする。医療的ケアとは、日常生活に必要な医療的生活援助を医療職ではない者が行なう行為のことである。

保育の世界では、医療的ケアを必要とする子どもたちに対して長く固く門を閉ざしてきた。しかし、すべての園が受入れを拒んでいたわけではない。岡崎市にある竹の子幼稚園では、「医療的ケア児」や「インクルーシブ保育」等の用語が社会に広がる前から心身にケアが必要な子どもを受入れ、他の子どもと共に育てるインクルーシブ保育に取り組んでこられた。

今から遡ること35年余、竹の子幼稚園は二分脊椎症の3歳児「のんちゃん」を迎えることとなった。同園は、他園から入園を断られ続けた親子が辿りついた日中活動の場であった。園長は、二分脊椎

児を初めて受け入れるにあたり、医療従事者を園に招き勉強会を開いた。園は親子通園を要求せず、医療的ケアは養護教諭が担当した。園長をはじめ全教職員が温かくきめ細やかな配慮を提供し、本児の3年間の幼稚園生活を支援した。後年に筆者が園長に、のんちゃんを園に迎えた理由を尋ねると、園長は「入園を断る理由がなかった」とお答えになった。その言葉の含蓄を、筆者は心に刻んでいる。

もとより人は、この世に役割をもって生まれてくる。のんちゃんもまた、大きな役割をもって生まれてきた。のんちゃんは昭和50年代に、医療的ケア児に我々教育者がどのように関わるべきかを問いかけてくれた。人は、単独で生きることが困難であるため集団を形成する。集団の中では各々に役割が与えられており、その役目を誠実に果たすことで真に社会で生きているといえよう。自分は天からどのような役割を与えられ生かされているのか、今一度、思いを馳せたい。

(本学 社会福祉学部社会福祉学科 講師)

厄介者の人間

深町 悟

人間という種について思考しようとすれば、その比較対象として、動物が選ばれるのは当然である。というより、人間がいかなる存在かを理解するのに他の動物を無視することはできないだろう。しかし、人間と他の動物とを厳密に区別し、それを定説にまで高める試みは、意外だろうが、いつも失敗してきた。というのは、言語、思考能力など、人間を特徴づけるように思える能力においてさえ、それらを備えている動物との差を厳密に定義付けることが難しいからである。一方で、人間も動物の中に組み入れて考えることは驚くほど簡単である。ゆえに、分類学の父リンネの、「猿には犬歯と他の歯の間に隙間がある、という事実以外に、人間と猿とを区別する特徴を何一つ発見できない」、との言葉に賛同するものである。鷹の視力が優れているように、チーターの走る速度が速いように、狼が伴侶に枯れない愛情を持っているように、クジャクが美しいように、生き物にはそれぞれ優れたところがあり、それが人間にとっては言語の処理能力なのだろう。では、人間を多様な動物の一種とみなすことで、我々がいかなる生き物かを明らかにできないだろうか、と考えてみたが、見えてきたのは、人間は動物の仲間としてはどこまでも厄介者である、という胸の痛い事実ばかりである。

「住みよい街」、「快適な空間」、「安全な地域」、これらの聞き慣れた言葉は、当然、すべて人間にとって、という意味である。人間は価値のあるものを作ってきたが、それらは他の生物にとっての有用さをほとんど無視して出来たものである。いや、有用どころか、有害でさえあるだろう。文明が彼らに利するところはなく、人間社会が繁栄すればするほど、他の生物の生活、ひいては彼らの生存そのものが脅かされるようになる、というのはこれまでの、特に産業革命以降の歴史が語る通りである。動物たちの惨状について全く知らない人間などほとんどいない訳だが、それをどこか当然のこととして受け入れているのが我々現代人の大半だろう。私も例にもれず、その内の一人である。人間は他の動物に対して、あまりにも利己的に振る舞い、冷酷かつ徹底的な搾取をしてきたと言えるが、それを我々が正当化できているのは、人間を最上の存在であらゆる動物の命に勝ると疑わない、その思い込みゆえになせる業なの

かもしれない。

一方では、その思い込み自体が案外不安定な土台の上に成り立っているのではないかとも考えられる。例えば、大切にしているペットと見ず知らずの他人が溺れ掛けている、両者のうち一方しか助けられないと仮定する。人はどちらを選ぶだろうか。ペットを選ぶというのは想像に難くない答えである。個人レベルで考えれば、命の尊さとは法律や社会が定めるように人が頂点であるとの前提に我々は生きていないとさえ言える。それならば、人間一人一人は、人間と動物という区分から離れ、愛情を注ぐ対象を広げることも可能はずである。また、自然に生かされている存在として謙虚な生き方をする 것도、その人の心がけ次第で可能なことであろう。人間の権利、および、その命の価値は歴史上類を見ないほどに高められた一方、他の動物の命は相対的に軽んじられるようになっていった。だが、人間が一人では生きられないように、人間という種だけで生きていくことも無理であるから、人間社会が利己的に拡大するのは避けねばならない。もし、我々の愛情を積極的に自然や、他の動物に向けていくことができれば、その拡大する速度を少しでも減じさせる手段となり得るだろうし、我々個々人が地上に息づく者として利他的になるべき動機も増えていくだろう。しかし、私にはそれらを可能にするまともな方法は、都市部から離脱する、ということくらいしか思いつかない。

作家のヘンリー・ジェイズは当時人口400万人を誇ったニューヨークを見て、「ないない尽くし」との感想を述べた。全てが揃っていきそうな最先端の都市を何も無い土地と考えた彼の意見は、100年余り前の世論からほとんど黙殺されたが、彼が現代でこの意見を唱えたとしても結果は同じだっただろう。そんな人工的な豊かさを有り難がる多くの我々現代人は、もしかしたら、本来享受できたはずの豊かさをまるで経験できずに今を生きているのかもしれない。それは、あたかも「虚しいものを求め、自らもまた虚しい者となった」との格言を体現しているようなものである。人間は動物を徹底的に搾取し、利己的に繁栄したことで、生物界の厄介者となっただけでなく、かえって本質的に貧しい暮らしを強いられるようになっているのかもしれない。

(本学 文学部人文学科 講師)

同朋大学“いのちの教育”センター講座一覧

連続いのちの講座 **テーマ** “いのち”の教育

会場 Do プラザ 閲覧 無料

7/23(火) 16:30～18:00

個でありながら仏性 — 絶え間ない自己形成 —

講師 岩瀬真寿美 (本学 社会福祉学部 准教授)

9/24(火) 16:30～18:00

近代日本の“いのち”と“死”

講師 金山泰志 (本学 文学部 講師)

10/22(火) 16:30～18:00

真宗の教えを聞いたものが活動する理由

講師 田中智教 (名古屋別院社会事業部)

11/12(火) 16:00～17:00

絵本の音楽会 — 赤ちゃん社長とモチモチの木 —

講師 疇地希美 (本学 社会福祉学部 講師)

12/3(火) 16:30～18:00

仏弟子たちの仏教

講師 福田 琢 (本学 文学部 教授)

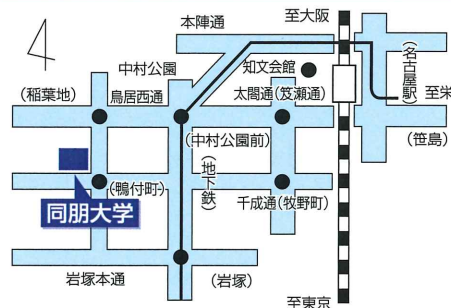
所 員

- センター主幹：安藤 弥 (文学部 教授)
 所 員：森村 森鳳(張偉) (文学部 教授)
 所 員：石牧 良浩 (社会福祉学部 准教授)
 所 員：岩瀬真寿美 (社会福祉学部 准教授)
 所 員：市野 智行 (文学部 専任講師)

お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター
 〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
 ☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通 市バス／栄又は笹島より④系統稲西車庫行、鴨付町下車
 地下鉄／中村公園より③系統稲西車庫行、鴨付町下車